

# 火星



# 七曜抄

山尾玉藻

喪歸りの話そびらに白玉粉

ナプキンが卓に林立夕立あと

雨あとの鹿の来てゐる草の市

三和土来る風のでこぼこ盆休

湯殿に湯溢れ台風来つつあり

初詣のころげ出でたる日照雨

秋風の大注連縄の下にあり

紋付が嬰抱いてゆく水の秋

鶏頭花貝殻山へかたむける

芭蕉葉のひるがへりみる女の家

# 火星作品 山尾玉藻選

陶枕に載せる頭をやはらかく  
母の背があり蚕豆をむきにけり  
男らの声が蔵より宵祭り  
羅や加齢のはなし美しく  
踏みあとに水ういてゐる茅の輪かな  
七夕の遣ひまはしの小鉢かな  
鉾立ちてより鉾町の四角かな  
☒ 瑰や良寛が脛抱いてゐる  
露天湯の底の玉虫拾ひけり  
身の丈の一枚ガラス遠花火  
耳うらに風吹いてきし夏越かな  
青田風昼の枕を裏返す  
露の葉に音立つ雨のはじめかな

姫路松たかし  
神戸深澤鱻  
宝塚杉浦典子

七夕や家のまはりに水流れ  
 金亀虫当たり玻璃戸のくもりけり  
 いろいろな犬通りけり凌霄花  
 朝方の雨のむせ来し蛭蓆  
 河骨のむかうの水の騒立ちぬ  
 思惟仏へ梅雨の暈を踏みけり  
 半島のぼんやり見ゆる辣菲掘  
 玉虫の虫の匂ひひでありしなり  
 明石戸栗末廣  
 蝸蛄の爪落ちてゐる銀閣寺  
 三伏の卵くり出す黒揚羽  
 蛸壺の散らばつてゐる大暑かな  
 がが**ん**ぼの終生貧乏ゆすりかな  
 豊中廣畑忠明  
 玉音ぎよくおんのあの日の如くトマト熟る  
 釣銭の手の濡れてゐるラムネかな  
 東山見ゆる町家の片蔭り  
 金婚の厨音する青簾  
 尻無川舟に人栖む大西日

# 選のあとに

山尾 玉藻

陶枕に載せる頭をやはらかに 松 たかし

なるほどと思う感動に素直にひたることが出来る。「頭をやはらかに」は「陶枕」の本意。

鉾立ちてより鉾町の四角かな 深澤 鱧

はたして「四角かな」と感じられたかどうか疑わしい。元々京の町筋が碁盤の目のようにあることが意識下にあったのである。「鉾」はむしろ碁盤の目の上の点としてあるのだが、こう表現されると何故か納得させられる。恒星圏作品へ荒梅雨の旅にしあれば華やきてゝも佳句。

七夕や家のまはりに水流れ 杉浦 典子

「水流れ」をあまり「七夕」と関係付けない方がよい。「七夕」の日の自然な風景として受け取る方がよい。しんとして快い抒情があり、これも「七夕」の句である。

いろいろな犬通りけり凌霄花 大山 文字

「凌霄花」の据え方が抜群、不動である。喘ぎながら「いろいろな犬」が通り過ぎるのが見えてくる。もしかすると「いろいろな犬の貌過ぐ」の方が一目解るかも知れない。恒星圏作品へ六月や灯点す宮内庁事務所も佳品。

ががんぼの終生貧乏ゆすりかな 戸栗 末廣

「ががんぼ」が大きな脚の割に小刻みに動くのを「貧乏ゆすり」と捉えた。品が良いとは言えないが言い得て妙。「ががんぼ」は大きく動くと脚が外れてしまうのだろうか。

玉音ぎょくおんのあの日の如くトマト熟る 廣畑 忠明

こう言う内容の句は社会性俳句隆盛時には多く作られていたであろう。しかし掲句の「トマト熟る」の紅が哀しい。

八月の橋のむかうの日昏かな 城 孝子

実生活での「八月」は未だ盛夏。しかし、この句から受ける詩情に俳句と無縁の人でも夏の終りを感じるだろう。「橋のむかう」は川の向うには無い人間の生活が見えてきて良い。

蔑切のこ糸のイタリア料理店 吉田 島江

「蔑切」は行々子の名がある通り、騒々しく余り耳触りが良くない。それを「イタリア料理店」という明るさが包み込んでいる。ここでは「蔑切のこ糸」も快い。

萩叢に夕風いたる 鶉籠かな 丸山 照子

宇治中之島辺りの景が見える。花の咲く前の「萩」が「夕風」に揺れているのである。句姿も美しく上品な叙景句。

空蟬の吹かれてをりぬ 茗荷竹 波田美智子

中七までの措辞は他にも見られるが、「茗荷竹」が良い。「茗荷竹」の繊細な緑の風に揺れているのである。美しい。

葉桜や家出グツズを描へおく 垣岡 暎子

俳句は全て創作であるが、この句はおそらく虚の世界を詠んだのであろう。中七以降、よくぞここまで言い切つたものと感心する。勢いがあるがやや暗い「葉桜」の季語も適確。

尼さまに呼ばれてをりぬ 捕虫網 西畑 敦子

特別な尼寺ではなく、普通の在の寺のようである。「捕虫網」の子は檀家の子であらう。良寛さまを思わせるような景。

船倉の潮湿りの 藪座布団 堀 義志郎

作者は「船倉」で「藪座布団」をすすめられたのであろう。潮の香は快くとも「潮湿り」はじとじと重い感じで不快である。それでも釣り仲間の好意には違いない。

梅雨晴間やる気となれば忙しく 加藤 君子

この作者らしい句。「やる気」となったのは家内仕事かも知れぬが、「梅雨晴間」がこう言う気分にはさせるのである。

死にしこと忘れてをりぬ 金亀子 田中みのる

へいきいきと死んでゐるなり水中花 權未知子<が先にへいきいきと死んでをるなり兜虫 奥坂まや>が後にあり類句類想で話題になったが、内容的には掲句も似ている。しかし「忘れてをりぬ」に独自性があり、類句を越えていると言つて良い。「死にしこと忘れてをりぬ」は作者ではなく「金亀子」である。それはをりぬの表現からも知れる。ここどころが面白いのである。俳諧味充分あり。

炎天に挑む手足を確かめて 中上 照代

作者は去年大病をされ、今はリハビリしながらの養生中のようである。「炎天に挑む」はどうしても出ていかねばならぬ用があつたのだらう。「手足を確かめて」の手で水準を越す秀作となつた。実感の強みである。

玉藻俳句鑑賞

秋晴のおどろきやすき神の鶏 玉藻

〔火星〕平成十五年十月号より

神鶏のいる所と言えば自ずから場所が見えてくる。ちよつとした音にも驚くという繊細さは神の鶏で納得する。それを大きく包み込んでいるのが「秋晴」である。何の変哲もない季語であるがこの句にはこの季語の働きは大きい。どこ迄も澄んだ神域の空は情景を立体的なものに広げて、いよいよ神の鶏が立ち上がってくる。

(高子)





# 恒星巻

加古みちよ

蟻の道たどりて出口見つからず  
三度豆つぎつぎ生つて面白し  
サンガラス居眠るために掛けにけり  
炎天に買ひ来し水のちやぶちやぶす  
魚捌く台風情報聞きながら

岡 和 絵

金澤 明子

雨あとの路地に復習へる祭笛  
銚まつり橋弁慶に波の音  
ぐい呑の縁欠けてをり蟻地獄  
郵便の来る頃ひらくひつじぐさ  
飛火野や子の跳ぶあとを鹿の子追ふ

半夏生手許に展く名塩和紙  
木菟鳴いてキラリと光るペンダント  
静かなるトラックに蹴く土用入り  
遠花火紺うつくしき京扇子  
川音に咲き昇りたる立葵

奥田 節子

木野本加寿江

香盒の内のくれなゐ八月来  
涼しさの釈迦が笑まへば脇侍とて  
八角釜一面づつの景涼し  
拝殿も靴べらも灼け昏みたる  
あまた神に鍵かけありぬ照り土用

金魚屋の溝に溜りし青みどろ  
鉄研ぐ夫に日焼けのなかりけり  
磯鳴の声に河童忌近づけり  
夕暮れの蒲を揺らして鳥発てり  
信州の旅に出る子に朝の蟬

# 獅子座

山尾玉藻推薦

土屋 醉月

丸山 照子

七夕の夜をのつびきならず寄る  
蓮ひらき子が婚姻の届だす  
雨の奈良いつもの顔と鱧の皮  
夫職を退く日のちかし藻が咲けり

吉田 康子

せせらぎの片耳にあり合歡の花  
雨つぶをぎようさん抱けり古代蓮  
神馬の眼みどりいろなり梅雨の明  
皿重ねる音のしてゐる盆の月

長田 曄子

蟬しぐれ母の號珀のペンダント  
蟬しぐれ猫の足うらピンク色  
杖おきて土用のうなぎ食べにけり  
子子の水のたちまち乾きけり

堀 義志郎

同じ月見てゐる国際電話かな  
露の葉の雨をはじける楸邨忌  
雑草の種のびつしり終戦日  
ある時は善人ぶりて西瓜喰む  
白玉や嵯峨野の箒を買うて来し  
かはほりの高さ麻酔の効きはじむ  
幼児期のあさきゆめみし天の川  
夜蟬のぢぢと西村京太郎

松井 倫子

鱧の皮なにはの医師の番付表  
東大寺の鴟尾を間近の冷索麵  
鶉の好きな向う岸より暮れ始む  
島影の揺らぎ河鶉の水走り

加藤 君子

碧玉となるに間のあり竜のひげ  
さあさあと団扇風して迎へけり  
ほほゑみはあぢさゐの蔭日の匂ひ  
羅の人どころとなく不機嫌な